

藤本強著『もう二つの日本文化』

——北海道と南島の文化——（UP考古学選書（2））

三浦圭介

本書が刊行されてから二年余りが経過しているが、先般弘前大学国史研究会の依頼により、本書の書評を担当することになった。著者は北海道考古学の権威であり、しかもまた豊富な考古学の知識と、実践経験に根ざした問題意識と方法論は、今日の埋蔵文化財の若手研究者の学問的牽引車としての役割を果たしており、私などが氏の「書評」を行うなど、厚顔無恥もはなはだしいので本書読後の感想文とすることでこの責をふさぎたい。また、前述のように本書が出版されてから二年も経過しており、その間「北の文化」の代表的な後北式文化の実態把握では欠かすことのできなくなった秋田県寒川II遺跡例をはじめとして、いくつかの重要な発見もあり、更に、著者自身のその後のいくつかの著書もあり、一部では本書より一歩進んだ論を展開している。したがって、ここでは本書の若干の紹介と著者が述べている基本的な考え方に對して、氏の主張する「ボカシ」の地域から本書をどのように読んだか若干述べるにとどめたい。

本書は北海道と南島に花開いた二つの「日本文化」の実態を「考古学」による歴史叙述と考古資料の学問的分析との間にある「溝」を埋めることとを目標に、難解な学問的な表現ではなく、解り易く解説したものである。また、著者の論理的でしかもやさしい文体は読む者を内容と共に

引きつける。

本書の構成はI日本文化と農耕のもつ意味、II北海道の文化、III南島の文化、IV北海道の文化と南島の文化の共通点、V農耕と社会について、からなる。

Iでは、日本文化とはなにか、その内容と歴史的形成過程を論じている。日本列島の文化は基本的に北海道を中心とした「北の文化」、沖縄を中心とする「南の文化」、本州の近畿圏を中心とする「中の文化」に分けられるとし、更にその違いが弥生時代にはじまる稲作農耕社会の成立と密接な関係をもつとしている。なお、IIでは「北の文化」の成立過程とその内容を詳しく論じている。著者の長年の実践経験の場としての地域のものであり、本書の骨格をなす。縄文文化の伝統の上に、「北の文化」の基礎をつくった続縄文文化の実態、発達段階の擦文文化、発生源を前二者とは異にするオホーツク文化、その後にくつアイン文化の各文化がどのように成立、発展し、また変容していったか、豊富な考古資料を基に、生業、居住、生活用具、祭祀遺構を通して、「北の文化」の独自性を明らかにしている。

IIIでは沖縄を中心とする南島の独自の文化である貝塚時代後期（本州、九州の弥生時代、平安時代に相当）の文化、それ以後のグスク時代の文化について詳細にしかもわかりやすく紹介している。

IVでは「北の文化」と「南の文化」が多く点で共通性を有し、それが地理的条件（大陸文化との交流等）、環境的条件の特殊性から生じたものであるとしている。そして、この共通性は形質人類学上のそれと大筋において一致し、それはとりもなおさず、「北の文化」、「南の文化」の担

い手が縄文時代以来大きく変化することなく続いてきたことを示唆しているとしている。両文化の最も共通する点は生業における漁撈の「優位性」であり、これが一貫して生活の根底にあり、その後のアイヌ文化、グスク時代の文化における交易の発達は文化の形成と崩壊に大きな役割を果たしたことを述べている。

Vでは総括的な内容で、狩猟、採集民の社会基盤を、農耕社会(「中の文化」の担い手)が力によってどのように圧迫し、支配していったか、また、その「中の文化」自体も、工業社会、脱工業社会へと基盤が変容するにつれて、「新・中の文化」に変質しつつあるとしている。

本書を貫くものは、単一だと思われる「日本文化」は日本列島全体からみればあくまで一つの文化にすぎず、北と南に、それぞれ異なる日本文化が、千年以上も前に形成されており、その異なる二つの文化を日本歴史の晴舞台に登場させようとしている点であろう。

「北の文化」、「中の文化」が融合する「ボカシ」の地域からみると、従来、「中の文化」が地域の文化形成に与えた影響のみが強調され、「北の文化」は、自分達とは全く異質な文化として隅に追いやられていたが、「北の文化」の実態を知る時、初めて、「ボカシ」地域の中に多くの「北の文化」の要素が入り込んでいることに気づく。

従来、都風の「中の文化」の影響の浸透度が文化のパロメーターと考えられてきたきらいがないでもない。しかし地方には地方の独自の歴史があり、それがその地方の文化を育くみ発展させてきたことを我々は時として忘れがちである。それを正しく喚気させてくれるのが本書であろう。本書はしかも論理的で、「ボカシ」の地域からみると、複雑な日本文

化も単純明瞭すぎる程模式化されており、説得力があり、氏の主張の多くに感銘を受ける。しかし、いくつか疑問な点もないではない。その一つは生業に占める農耕の問題である。稲作は別にしても、雑穀を中心とした畑作農耕は、北海道の文化に相当なウェイトを占めていることが近年序々に明らかにされており、それがどのように、「北の文化」に影響を与えているのか。また、「北の文化」の担い手達の年代観もやや気になるところである。この他、限られた紙面の中で、多くの問題を指摘しているため、もう少し掘り込みが欲しい箇所もいくつかあるが、これは私だけの願望であろうか。

いずれにしても、日本文化の形成や、日本の歴史に興味をいだく人々にとり、「日本文化」とは何か、その源流はどこにあるのか等、「わかりやすく」知るには、この上ない贈り物であろう。

(東京大学出版会、一九八八年、A五判、一二九頁、一八〇〇円)

(青森県埋蔵文化財調査センター)